クロの旅～Black.story～

悪魔の妹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロの旅～Ｂｌａｃｋ．ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ４７１８Ｍ

【作者名】
悪魔の妹

【あらすじ】
１５歳の少女　クロと１３歳の女の子　ユウ
彼女達の　少し変で　残酷で　暖かい　そんな感じの　お話

Devilgirl　Kuro（前書き）

15歳の女
クロ
身長164m
サイズは上から
71
60
85

制作された体が　9月6日だったので　クロ

この　少女の戦いの記録……

「貴方達に　みて　欲しいから　私は　ここに　この思いをしるした」

Devilgirl　Kuro

私は　ヘリである　所に降ろされた…

私に　課せられたミッションは　大統領の娘の救助とサンプルの回収、　そして　スペインのテロ　組織の殲滅だ。

私は　ある組織　『ＥＶＩＬ』　すなわち　悪を滅ぼす　悪の組織の　特殊新型　人型バイオモンスターだ

私みたいな　奴は　他にもたくさんいて

それを作るためのサンプルを　スペインのある闇の組織長に　盗まれたのだ…

そして私みたいな奴を『Ｄｅｖｉｌ』と呼ばれて　いる。

私は　こんな生物兵器の拡大を止めるため　このミッションに　この身を捧げた……

「さて…　行きますか。」

そういって　私は　この作り物の体で　スペインの道を進んだ……

私は途中に民間を見つけそこに入ろうと　したら　行きなり後ろから　斧が飛んできた！

どうやら　待ち伏せされていたようだ…

「ハアッ！」

私は斧を左肘で体を捻らせて　弾いた……

私には後ろは見えなくても　空気の切れる音で　全てが　分かるのであって

「敵は…　４人か…」

三人が斧をもち　一人が素手　すなわちさっき　斧を投げた奴なのだろう…

私は　素手の敵のほうに走って行った…

“うぇぃ！”

敵の左パンチを右手で止め　その伸びきった腕の肘の所に右膝で蹴りをあびせた！

ゴキッ

どうやら　その敵の左腕は折れたようだ……

その時　左側から　二人の敵が斧を振りおろしてきた！

「ハアッ！」

ほう　いって　腕が折れた敵の溝口から　抱え上げ　盾にした

ザクッ

二人の敵の斧が　この盾の男の肩と頭に食い込んだ！

もちろん　この盾の男は死んだ……

その二人のうち　頭に斧を食い込ませた奴の斧は　すぐ　外れたが

肩に食い込ませた奴の斧は食い込んだままだ……

そのときもう一人の斧の奴が斧を右から左に振ってきた！

私は　その斧を掴んでいる手を蹴り　相手の斧を奪って　頭に斧を食い込ませた奴に　投げつけた！

ガスッ

見事に　肩の動脈を切り裂き　その男も死んだ…

そして手を蹴られた奴の　頭を私は　掴み　１６０°回転で　首の骨を砕いた！

残り一人！

“がっ！”

そういって　敵は斧を抜き終えた。

その瞬間に　その斧を押してやって　敵の頭に食い込ませた。

「まずは　４人か……
しかも　まだサンプルの投与はされては　いないらしい……」
そういって　私は　その場を去った……

Devilgirl　Kuro（後書き）

どうでしたか。

アドバイスや　感想があったから　是非　書いてください。
よろしくお願いします。

それじゃ　次回予告

迫りくる　村の悪魔…
チェーンソー　男……
そいつに　悪の悪魔『クロ』は勝てるのだろうか…

次回　クロの旅
【ＨＡＺＡＲＤ】お楽しみに

HAZARD（前書き）

クロ

黒髪のショートカットで　目の色も黒。
あまり女らしい体格ではない。

足は速くないのだが
ステップと身のこなしが抜群で　視力は8．0まで上げれる……
多少の格闘スキルをインプットされて　いるが　大体は自分独自の
スタイルで戦っている。

攻撃力　★★☆☆☆
守備力　★☆☆☆☆
瞬発力　★★★★★
柔軟性　★★★★☆
格闘性　★★★☆☆
本能性　★★☆☆☆
武器性　★★☆☆☆
頭脳性　★★★★☆

それじゃ　本編へ

HAZARD

私のハンドガンに　ある情報が表示された……

私のハンドガンは　『ＳＩＧ　ＳＰ　６１８』と　言われる　ハンドガンそのものに　情報（メール）が表示される　特殊なハンドガンだ。
そして　ハンドガンの弾は　エネルギー弾であり　対バイオモンスターに作られたものである。
しかし自分の腕にもダメージが及ぶので　人間が使うことは　不可能とされている……

そう……

人間には……

そういえば　情報が届いたんだっけ。
私は　読んだ……
「1．この先に　ある村がある……　まだ人間であったら　殺す必要はない……2．もし　敵が攻撃的と　判断された　場合は殺害を許可する
3．電磁砲（ハンドガン）の使用は　控えてもらう……　最高で2発とする。
4．ここで自分のバイオモンスターを起動させることは　許されていない……
5．死ぬな……」
こう書いてあった……
とりあえず　私は村まで　進んだ……
どうやら村には　誰もいないようだった……
「なにがあったの……」
もう　ここにいる必要は　ないので　違う門を　進もうとしたとき！
ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！
なんと私が開けようとした　鋼の扉をある物で切り裂いて　覆面を付けた　男が現れた！
そして　その男が　もっていた　物とは！

「ヒュースクラブル！」

ヒュースクラブルとは　対バイオモンスターようの　チェーンソーのことである。

すなわち　この覆面の男は……

人型バイオモンスター

「『Ｄｅｖｉｌ』！」

私は　奴との距離をとるために　後ろにバックステップした。

「！」

しかし　男の前方へのダッシュには　敵わず　男のチェーンソーが　振り下ろされてきた！

普通ステップ中　体が浮いていて　回避は　不可能だと思うだろう……

「ハアァッ！」

私は　その時に近くの壁を蹴り　その反動でチェーンソーを回避した……

が！　その後に　蹴りをいれられて　吹き飛ばされた！

頭から地面に落ちそうに　なったが　左手でバク転をして　体制を立て直した…

そう……

体制を立て直した……

男は　また走りよってきて　チェーンソーを振ってきた。

男の迷いのない　チェーンソーが　クロの頭上に　振り下ろされる！

「だから……」

そう私はいった

「だから！　体制を立て直したって　いっているだろぉぉっ！」

そういって　私は前方に跳び　相手のチェーンソーをもっている腕を右肩で止め　そのまま　右手のハンドガンの銃口を　男の覆面の左目に押し込んだ！

そして！

ジュィィィィイュュン！

この音とともに　電磁砲が放たれた！

しかし！

奴は　覆面を脱ぎ　ヒュースクラブル　（チェーンソー）　を捨てて　回避をしやがった……

そして　相手の　顔を見たら！

「女…」

相手は実は　女だった

確かにスマートな体であったが　私のＡカップよりも　小さい女が

いたなんて……

こいつカップあるのかな？

そんな　ことは　どうでもいい

そして　その女の髪は青のショートカットヘアー

目は　緑色だった。

「／／／／っ」

その女は　少し悔しそうな目をして　逃げていった…

私は　とりあえず　ここに残った　チェーンソーをハンドガンの電

磁砲で　撃ち抜いた。

これで　約束の2発を使い終えた……

そして　私は　この村を越えていった……

ＨＡＺＡＲＤ（後書き）

どうでしたか。

現在　チェーンソー（ヒュースクラブル）使いの女の子の名前を募集中です。

是非感想に　添えて　書いて下さい。

それじゃ次回予告

迫りくる　罠の嵐…

電磁砲の使用は認められていない…

そして　クロの出会った人物とは…

次回　クロの旅　～Ｂｌａｃｋ．Ｓｔｏｒｙ～

【ＤＥＡＴＨＧＡＭＥ】

DEATHGAME（前書き）

「失敗作は排除が必要だ
いますぐ　エクゼキューターがくるまで　寝てもらおう」

そして　私は　寝てしまった。
私は　裏切られたのだ…

DEATHGAME

また　私のハンドガンに情報が　きた。

【1．電磁砲の2発使用を確認

2．自分の意思で殺害の判断をしても　構わない

3．電磁砲の使用は15分に3発まで可能とする

4．自分のバイオモンスターを発動させるのはバイオモンスターに対抗するのみとする

5．本部が　スペインからの襲撃可能性があるので　アフリカに移動する（もともとは　イギリス）

6．SIG　SP　618の情報機能は停止

7．ミッションは必ず成し遂げよ

8．死ぬな】

「どうやら本部はヤバいようね…」

私は　とりあえずこう思った……

「ハンドガンの情報機能が無くなったら私は帰れないんじゃ……」

まあ　気にしないことにした……

とりあえず私は　詮索を開始した……

「！」
行きなり足にとらばさみが襲おうとした！
私は　とっさに足を引き回避をしたが
サンドトラップが私を襲った！
サンドトラップとはこの８を人に例えると
｜８｜
←
＼８／
←
＝＜プチッ
てな感じになる罠だ。
私はそれをジャンプして回避したら　次は上から岩の玉が落ちてきた！
私は電磁砲をトリプルショットして　その反動で岩を回避した……
……

「三段トラップなんてびっくりしたー」

とか　いっていたら　なんと！

落ちた岩の玉が私の方に転がってきた！

「マジかよ…」

とりあえず走った！

約１００m走った所にトンネルがあった！

私は　トンネルの中に入って　後ろを確認した。

ゴロゴロ！

綺麗にトンネルの中にも　岩の玉は入ってきた！

私は走り続けた……

トンネルを抜けて　横にローリング　岩の玉は　ある大きな家の中に転がっていって　その家の壁にぶつかり　砕けた。

大きな家の壁も　砕けて　その家の中が　見えた……

「！」

私は　息を飲んだ！

「あの子は！」

そう…　その家の中には私をヒュースクラブル（チェーンソー）で襲った　女の子が　縄で縛られ　眠らされている状態で　吊されていた……

「なんであの子が…」

私は　とりあえず　その女の子を助けようとして　家の中に入りこんだ……

クラッ

私はいきなり眠気に襲われた……

どうやら　この部屋から睡眠ガスが出ていたのであろう。

とりあえず私は　女の子の縄だけを　解いて

眠りについてしまった…

ＤＥＡＴＨＧＡＭＥ（後書き）

やっと三話の終了

オリジナルバイオハザード４！クロの旅～Ｂｌａｃｋ．Ｓｔｏｒｙ

～次回予告

あの女の子の名前が明らかに……

そしてクロの電磁砲が…

さらに　迫りくる　敵　新型人型バイオモンスターがクロを襲う

次回　クロの旅　【ＹＯＵ】

お楽しみに

YOU（前書き）

「クロ　私は貴女に感謝している
生きる理由をありがとう」

そう私は　心の底から思った

私は　クロのために……

YOU

私は　目が覚めた

「！」

私は手錠をかけられていて　あの女の子とある部屋の中に入れられていた！

「どうやら目が覚めたようね」

そう　女の子はいった…

私も一応15歳だから　女の子だと　思うけどね。

「なんで　私を助けようとしたの？」

そう女の子は　私に尋ねた

「なんでだろうね」

私は　そう答えた

「貴女の名前は何なの？」

そう尋ねられた

「クロだよ。シリアルナンバーは1994090６。貴女は？」

「私には　名前がない…」「ない？」

「私は　無理矢理死体からサンプルで作られた低型バイオモンスター……シリアルナンバーもない……　だから私は　貴女を倒して名前を貰おうとした……でも……」

「私に負けた……」

「そう……　私はあの時自分のバイオモンスターを発動させていた……それでも　力の差があった……　そして　逃げていったら……

「裏切られた……」

「そう　私は裏切られた……というか処分品として扱われた……」
「処分品？」
「貴女も処分されるよ……」
「何？　処分って……」
「そうすぐ　エクゼキューターが……」

バコオォォォォン！

その音と共に　巨大なバイオモンスターが現れた！

「もう　私達は死ぬ」
平然と女の子はそういった
「ちょっと貴女！何平然としてんのよ！」
そう私はいった…
「もう　私には生きる理由がないから……」
そう　彼女はいった……

その時敵が踏み付けてきた

「バッカヤロー！」
そう私は　叫んで自分のバイオモンスターを発動させた！
彼女の手錠と私の手錠を体に取り込んだ！
「はぁぁあ！」
そう私は　叫び　敵の足を止めた！

私のバイオモンスター能力は　バイオテクノロジーの物を分解　そして体内で再構築させる　能力だ

私は腰のハンドガンを……
ハンドガンを……
「……」
「どうしたの？」
そう女の子は尋ねた……
「私のハンドガンがない……」
「それは　ほらあそこに粉になっているよ……」
本当だ　粉になっていた
袋詰めだ……
「だから諦めた方が……」
そういう女の子を無視して私は　その粉を私のバイオモンスターで取り込んだ！
「がああああぁぁぁぁっ！」
電磁砲を体に取り込んだのだ　体が痺れた……
「ハアッ！」
そういって　体からハンドガンをまた再構築させてハンドガンを復活させた……
「バ、　バカな……」
どうやら女の子は驚いてるようだった

そんなことは　どうでもいい

「！」

私は　バイオモンスターに捕まれた！

「くっ！」

高々と上にあげられて　地面にたたき付けられる

「がぁっ！」

肩から落ち　痛みが体内を走った

そして　そのバイオモンスターの踏み付けが私を襲う

「な　め　る　な　よぉぉお！」

私は　ハンドガンに手錠のバイオテクノロジーパワーを追加させて

　相手の体に　電磁砲を発射した！

ジュィィィィイン！

雷が相手の体を襲う！

相手は黒焦げになった……

「もう　大丈夫だから」

そう私は女の子にいった……

「なんで！なんでよ！私はもう死んでもよかったのに！」

そう　女の子はいった……

「生きる理由がないから？」
そう私は聞いた
「そうよ！」
女の子は　そういった
「でも　貴女は自殺をしていないじゃない」
「！　そっ　それは……」
「生きる理由が　欲しいんでしょ」
「……」
女の子は何もいえなくなった
「貴女の名前はユウ……」
「！　な　何を！」
「私が貴女にユウって名前を付けた。だからユウは私の友達……
ユウは私をクロといってね。」
そう私はいった
「な　何かってにきめているのよ！それにそんなのが私の生きる
理由になるわけないじゃない。」
そう　ユウはいった
「そんなので……そんなので……」
そういって　ユウは涙を流した……

「あぁぁぁぁぁ」
ユウは泣いた　そうユウという女の子も　人型バイオモンスターという兵器のまえに　人間なのだ……
「クロ　クロ　クロクロ」
ユウは　何度も泣きながら私の名前を呼んだ

その時！

黒焦げにした　バイオモンスターが立ち上がった
私はハンドガンを構え　電磁砲を撃とうとした
すると　一つの小さな手が私のハンドガンを包んだ……

「クロ……」
そういってユウがハンドガンを包んでくれていたのだ……
「いくよ！　ユウ！　」
そういって　ユウと一緒に電磁砲を発射させた

ギィィィイイン！！！！

その時　の電磁砲は通常の電磁砲よりも強力で白銀の雷が　バイオモンスターを襲った
　超電磁砲ということにしよう
バイオモンスターは黒く焼き爛れ　そして　灰になった……

「やったね」
そういって私はユウに振り向いた

「そうだね／／／／」
ユウも赤面をして返事をしてくれた……そして……

「ありがとう　クロ」

そうユウは私にいった

「いこう　ユウ」

そういって私達はこの場所を去っていった……

おまけ

「どうして　クロは私にユウって名前をつけたの？」
私は　クロにそう聞いた
「私さー　ユウに貴女っていってたじゃない。貴女を英語の発音でユーって呼ぶから　それを可愛らしくしてユウ。だよWW」
そうクロはいった……
「安易だ……」

そう私は　いった…
「えっ　可愛くない？」

「クロの由来は……」

「制作されたのが9月6日だったから」

「やっぱり……」
そういう話をしながら　私とクロは　ある橋の上を渡ろうとしていた……

ＹＯＵ（後書き）

クロの旅も　完璧オリジナルへ

クロとユウの旅へと大変身！

是非感想をよろしくお願いします。

次回予告

橋の上に舞い降りたのは　人型バイオモンスター……

敵のバイオモンスター能力にクロとユウは勝てるのか……

次回　クロの旅

【Ｔｒｏｕｂｌｅ】

お楽しみに。

Ｔｒｏｕｂｌｅ（前書き）

１３歳の女の子ユウ
バイオモンスター能力はバイオテクノロジーの物の力を強化させる力

死体から作られていて　記憶以外は　全て生前の脳と同じだ……
青い髪に緑の眼
胸はクロより小さく身長は１５０ｃｍぐらいだ……

攻撃力　★★★☆☆
守備力　★★☆☆☆
瞬発力　★★★☆☆
柔軟性　★★★☆☆
格闘性　★★☆☆☆
本能性　★★★☆☆
武器性　★★★★☆
頭脳性　★☆☆☆☆

それじゃ本編へ…

Trouble

私はユウから　ある情報を聞き出した……

「大統領の娘かどうかは　わからないけど　ある女性を私の　元頭領(ボス)はサンプルの交換条件で　人質にしたって情報があったよ。
　でも　このサンプルは　『世界のために　奴らには　渡せない』っとかいって　サンプルは　渡さなかったらしいね」

さらには

「スペインの田舎町を過ぎると　ある巨大教会があって　そこに
　その頭領は　住んでいるって　噂があったよ」

ここまで　情報がわかった
私達は教会へ　向かうためある橋をわたろうとしていた……

その時　私とユウは　ある殺気に気づいた……

ゴォォォォォオ！

その音とともに　ある物体……　いや　人が落ちてきた

「！」

しかも　その人とは……

「シリアルナンバー１９９４１０２７……」
そう私は　いった…

「その呼び方は　やめろシリアルナンバー１９９４０９０６いや……クロというべきかな…」
そう　男はいった……
「エヌ……」
そう私はつぶやいた……

「誰なの　こいつ」
ユウが私につぶやいた

「私と同じ　組織開発の特殊人型バイオモンスター　シリアルナンバー１９９４１０２７のエヌよ……」
そう私はいった……

「クロ　何故貴様は　そのサンプルバイオモンスターを生かしている……」
そう　エヌは私にいった

「貴様のミッションは忘れたのか。　このバイオモンスターは殺す対象のはずだ」
そのエヌの言葉を聞いて　ユウはうつむいた……

「ユウを私達と一緒にしないで！　ユウはもとは人間！　怪物扱いしないで」
そう私はいった…

しかし
「でも　今は怪物だ……それに何故貴様は　それほどにその女をかばう？」

「友達だからだ！」
そう私は　答えた

「友達か……」
そう　エヌがいったとたん
「！」

足にある触手が絡み付いていた
そして私はその触手に引きずられて　橋の奥の岩にたたき付けられた

「くだらん」

エヌがそういったのが　私に聞こえた

「この！」
私は電磁砲を撃った！

その攻撃を　簡単にエヌは避けた。

「友達なんぞ　戦いの迷いを作る元凶になるだけだ」
エヌはそういった。そしてさっきの攻撃　エヌはバイオモンスターを起動させていた。

エヌの腕から左右４本づつの計８本の触手がでていた……

そして左手からでている４本の触手にユウは捕まっていた……
「ユウ！」
私は彼女の名前を呼んだ
その私の言葉を　聞きエヌは　右手の触手をスクリュー状にして
ユウの首元においた……

「！」
私は　動きが止まった……

「ほら　友達は邪魔にしかならない。
これが答えなんだよ」
私は　反論なくなった…ただこれだけはいった……

「ユウを助けてよ…」
そういった……

「クロ……」
そういうユウの声が聞こえた…

いきなり　私の頬にユウを捕まえていた触手の一本が　あたった
私は少し脳が揺れた……

「貴様は　バカか？　さっき知り合ったばかりの自称友達を　助け
ようなんて　カッコつけはよせよ」
そうエヌはいって　私の体に攻撃してきた……

「ユウを……」
私はそれだけしか言わなかった……

「辞めてよ！　クロ　なんで　私をかばうの！」

そういう声が　聞こえた…

なんでだろ　とかも思った
でもただ痛みが体を走っていた

「ああ　もう幻滅だ。自分てこんなミッションに登録した奴が　こんな夢見がちな乙女様だなんて……」
そういうエヌの声が聞こえた……

気づいたら　エヌのスクリューは私の額に向いていた……

「正直にさ　　このユウちゃんは　いらない子です。私を助けて
　といいなよ。ク～ロ～ちゃん。」
そんなエヌの声が聞こえた……

ユウは　泣きながらこっちを見ていた……

そして私はいった
「ユウを放せ！馬鹿野郎！」

そういって電磁砲を私は撃った。

「くっ！」

そういってエヌは電磁砲を回避した
その瞬間に私はエヌのスクリュー状の触手を掴み岩に差し込んだ！

「くそっ！」

エヌは　一瞬だけ触手を抜くために　バイオモンスターを解いて再びバイオモンスターを起動させた。

その一瞬に私は　ハンドガンを自分のバイオモンスターで取り込んだ

「ぐっ！」

私の体に雷が走るのがわかる

しかし今は　そんなことはどうでもいい！

自分の体ごと電磁砲にして　ユウに跳んでいった！

「ユウ！」

そういってユウを掴んでエヌの触手を回避した…

そして私は　バイオモンスターを解除させ　ハンドガンを構えた！

「フッハハハハ！」

エヌの笑い声が聞こえる

「お前の情報はわかっている……　その電磁砲はもう三発撃った！　あと15分は撃てないはずだ！　ハハハハ！」

うるさい声が聞こえる。

そこに　私は超電磁砲を撃ち込んだ……

「！」

エヌは驚きと　その速さに対応出来ず　体を雷が貫き　エヌの体を燃やしていった「何故だ……そしてその力は……」

そういうエヌに私は答えた

「最初の電磁砲を撃ってからもう15分はたっていたの……そして…」
そういって　私は私を抱きしめて電磁砲をバイオモンスターによって強化させてくれたユウを見る

「そして　これが　友達の力だ」
そう私は　エヌにいってユウに振り向いた
「私にとってもユウが初めての友達だったから……ただ私も寂しかったから。そしてユウが友達になってくれたから…」
そう私はいった

ユウは　私の顔を見て泣いていた……

「クロ……」
そういって　ユウは私にキスをした……

「／／／／！っえ　　ユ　　ユウ！」

いきなりだったので私は驚いた

「これは　友達にする誓いみたいなものなの」
そうユウが　説明した……

「えっ　あっあぼへあ！」
もう私は人語をいえなく頭がクラッシュした…

「もうっ……」
少しまともになって私がいったことばは　それだけだった……

そして私達は　教会の前まで進んだ……

Trouble（後書き）

「これが　友達か……」
少し　俺はうやらましかった
すぐにユウって子を殺しはしなかったのは　友達の可能性を試したかったからでもあった……

フッ

俺は　そう思い　粒子と化していった……

次回

教会に行く前に死に神を倒せ……

こいつはバイオモンスターなのだろうか……

次回　クロの旅

【ＨＥＬＬ】お楽しみに

ＨＥＬＬ（前書き）

エヌ　　シリアルナンバー１９９４１０２７
バイオモンスターは八本の触手を操る
生れつき人型バイオモンスターと作らされた運命に絶望した１５歳の少年
つねに「一人がいい」といい単独でことを成すが　いずれ自分の思いを打ち砕く奴がくるのをまっていた……

攻撃力　★★★☆
守備力　★★★★
瞬発力　★★★☆
柔軟性　★★☆☆
格闘性　★☆☆☆
本能性　★★☆☆
武器性　☆☆☆☆
頭脳性　★★★☆

「やっと　逢えた……
今まですまなかった……」
俺はそう思いながら　ナイフをふるった…

「ありがとう　クロ」

そう思い　俺は戦った…

HELL

私達は　教会の前まできた……

途中に　たくさんのノーマルバイオモンスターが出てきたが　全て殺ってきた……

「つ、　着いたぁ！」
そう私は　いった……
「まだ　中には入ってはいないんだけどね」
そう　クロは私にいった……

「それじゃ　早速、中に入ろうか」
そうクロはいった

その時
「！」
何か　体に恐怖が走った……

「どうしたの？ユウ？」
そういって　クロは私の顔を覗き込んだ……

「　な、なんでもない」
そう私は答えた……

―さっきの　恐怖はなんだったのだろう……バイオテクノロジ

ーの感じもしないで、殺気も感じないのに　自分の死が　クロの死が脳に焼き付く！…

そんなことを私は思った……

「ユウ？」

そういってクロは　また私に振り向いた……

「！」

私は　驚いた！そして恐怖した……

クロの後ろに　私がわからない人影があったからだ……　それもバイオテクノロジーでない何かをもつ人影を……

そしてその人影は……

「クロ！」

そう　叫んでクロに抱き着いた！　その人影のはなった弾丸が外れる……

「なっ　　何が！」

クロも驚いたようだ……

その人影は　バイオモンスターでもなく　ただの人間であるというのに　殺気がなく　それなのに　死の恐怖を相手に植え付けるかのような覇気をはなっていた……

「ク　　クロ…」

そういって　私はクロをみた……

「こいつは　何なの！」
そうクロはいった…
そして
「「！」」
私達は同士に驚いた！

目の前にさっきの人影が撃っていた　ハンドガンが飛んできたのだ！
そして　人影は……

「ユウ　伏せて！」
その　声に私は脊髄反応を起こし　伏せた

そして　目の前に飛んでいたハンドガンがバラバラに切れていった。

私は後ろをみた……
そこには　とても青髪で緑の瞳のまるで　私の男みたいな　人がいた！
ただ　私が　いえることは……
「ば　化け物」
そう　ふるえた声でいうだけだった
私だって化け物のはずだった　それはバイオモンスターであるから　…
なのにこの男は……人間でありながら　殺気もおこさず　気配もたてず　空気の音さえも　流さないような奴だった……

「俺が化け物か……俺はただの人で無しなだけだ……」
そう男はいった……

「このっ！」クロがその男にハンドガンで電磁砲を撃とうと構えた……
その男は　平然とそのハンドガンの銃口を見ていた
クロは私をみて　電磁砲撃った
私はその瞬間にその男から離れた……
ジュィィィィイン！
雷の弾がその男の体にあたろうとした
「な　何故よけな……」
そうクロが言おうとした瞬間に！
「！」
男はクロの目の前にいて銃口を手の平でふさいでいた……
「そんなのじゃ。一人として守れない……」
そう男はクロにいった……
「なっ　このっ！」
そういってクロは　ハンドガンからまた電磁砲を打ち出した……
が！
いきなりハンドガンが揺れだし　クロは弾きとんだ……
「な　なんでクロが…」
そう　私はいった
「雷は　空気のない所では発動などしない。銃口を抑えれば　お前の技など無価値だ…」
そう男は　いった

そして男はナイフを構えて　ゆっくりクロに歩みよった……

「待って！」

私はクロの目の前に仁王立ちした！

「まだクロは　負けていない！　私　だって！」

そう私はいった

「ユウ……」

そうクロは　いった…

「おい　そのクロって奴はお前の仲間なのか？」

そう男は　いった

「友達だ！」

そう私はいった……

「……」

男は　黙った……

「ユウって名前か……

いい名前だ……」

そして　男はいった

そして私の所に男は歩みよってきた

なのに

私には恐怖がなかった

何か　違う思いが体の中を走った

そして　男は　私の手の平を開いて　クロのハンドガンを私に握らせた……

そして

「よかった……」
それだけをいって
私にキスをした……

その意味が私には　何もわからなかった

ただ　涙だけが　でていた　…

気づいたら　その男の姿は見えなかった……

なんでだろう　私はその男の人と離れたくなかった思いがあった……

「ユウ……」
クロの声が私に聞こえた……

「よかったね……　クロ……　私達はまだ生きてる……」

ただ　私は気づいた……

「いこう　クロ」

その男は……

「うん……ユウ」

私に　生きて欲しかったのだと……

涙も晴れ　　私とクロは教会に入っていった……

ＨＥＬＬ（後書き）

「ただ俺は待つことにしよう……
クロの旅の終わりを……
妹の旅の終わりを……」
そう　俺はいって　村に俺は　戻った……
「ソラ……」
今は　ユウという名前の女の子の名前をつぶやき　俺は帰った……
「……」
涙を流し　俺は歩いた……

俺（前書き）

クロの旅　外伝

「ソラ……」
そう俺は　つぶやいた……

俺

俺は妹を　助けたかっただけだった……

俺は　死に行く妹を　助ける為に　　教会へ　と渡してしまった……

その後に　　教会で妹が息をふきかえした　ってことが届いた……

だが……

妹は帰ってはこなかった……

俺が妹をみたときには……妹は　自分の名前をなくして

　自分の名前を手に入れるために　戦っていた……

教会によって兵器にされていた……

『お前の名前はソラなんだ』

そう　俺は　いうことはできなかった……

『もし　　俺が　ソラにこの名前を伝えたら　　ソラの生きる意味がなくなるんじゃないか…』

そういう思いがあったからだ……

そして妹は　　誰かを殺すたびに　悲しい顔をしていた……

俺は　教会を怨んだ！

教会を壊して　妹をソラを　普通の人間と同じように　　あの時と同じようにしてやりたい。と思って俺は　強さをもとめた……

……

そう……

ソラを兵器にしていまった俺ができることは
俺自身が兵器の強さをもって　ソラと一緒に……

そんな記憶をたどりながら俺は　村へと帰った……

「ソラ……」
今はユウって名前の妹の名前を呼びながら……

俺（後書き）

「！」
俺の目の前に何者かが現れた！
「そんなに　妹が恋しいか？」
そういう　男の声が聞こえた……

「お前が……ユウを……」
昔ソラという名前の妹の名前を俺は　いった……
「ユウ……ソラ……」
一人の妹の名前を俺はいった……

そういって　俺は　男に向かって　ナイフを構えた……

洗脳（前書き）

俺は　ユウをソラを殺したくない　殺したくなんて……　やめろ！

俺に話すな……

殺したくなんて……

殺したくなんて……

ああそうだユウは殺すんだった……

もう　言われるままに　動けば　いいか……

そう……

殺そう……

それがユウのためなんだ……

洗脳

俺は　ナイフをふるった……

俺のナイフが　その男の首に当たるのがわかった……

「これは　　驚いた。　人がこれほど　強くなるとは。」

「！！なっ　　死んでない！」

俺は　一瞬動揺した…

「死ぬ？　　ただのナイフを使う人間が　私を殺せるとでも？」

そう　男はいった

俺は　全ての空気と心を通わして　ナイフで　男に何回も　突いた。

でも　その男は　何もきいていなかった……

クソッ！

そう思ってしまった…

一瞬殺気を出してしまい俺はその男の　蹴りをくらってしまった……

「ガハッ！」

初めて　バイオモンスターの攻撃をくらった俺は　意識が飛びかけた……

そして　体が動かなくなった……

「私を　殺して何になるというんだ…？」
そう　男はいった…

「妹に…ユウに　……　これ以上……　悲しまないように……
……」

俺はそういった
いや　正確には　いってしまっていた……
勝手に　言葉が出てしまっていた……

「何故　ユウって奴が悲しんでいるのだ？」

「それは　俺が　教会にユウをやったから……」

「だから　教会が悪いと？悪いのは　お前じゃないか？」

「俺？」

「そう　お前がユウを悲しませている…」

「俺が……」

（違う　俺は　ユウのために……　ユウに……ソラに……生きて

ほしかったから……）

「そう　お前が悪いんだ……」

（違う　違う　違う　違う　違う　違う　俺は……）

「俺は　どうすれば……」

「お前が　ユウを悲しませているんだろう……だったら
お前がユウを殺して解決をしろ」

（誰か　そんなことを……）

「そうか……殺すのか……」

（違う　俺は　殺したくなんか……）

「そう　殺せ」

（やめろ！）

「殺す」

（やめろ！）

「殺すんだ。」

（やめてくれ！）

「ああ　殺してやる」

（やめ……！）

それからはもう何も考えれなくなった…

「さあ　裏の自分も殺すのをみてめてくれたぞ　殺して　楽にしてやってこい」

「ああ　　ユウを　殺す」

そう　殺す……

俺は　ユウを殺すべきだったんだ……

洗脳（後書き）

「ユウ？」
そう　クロは私にいった……
「どうしたの？」
「ううん　　どうもしてない」
そう私はいった……
ただ　私は誰かの悲しみと苦しみが伝わったようなきがした……
そして　また　違う何かが伝わったようなきがした……

「いこう　クロ」
そういって私とクロは
教会へと　入っていった……

RED（前書き）

これは　洒落にならない！

「あぁ！」

痛い

そして

私の乳房と背中があらわになる……

「この！　エロ犬が！！」

RED

私は　教会の中に入った……

いや　侵入したというべきかな……

何か目の前に犬がいるからね……

それも……

バイオテクノロジーを人型『Ｄｅｖｉｌ』と同じ位取り入れた新型のバイオモンスター……

「ね　　ねえ　ユウ…

犬って可愛いものだよね……」

そう　私はいった……

「だ　　だよね……クロ」

ユウはそう　答えた……

私達の目の前にいる犬は何か　気持ち悪かった……

しかも五体もいるし……

「ガウッ！」
犬の大群が飛び込んできた！
「ユウ！」
私はユウに抱きしめてもらった……
「「いっけー！」」
二人で息をあわせて　超電磁砲を撃った　４体の犬が消し飛んだ！
「あれっ！」
以外とあっさり死んだ……
ラストの犬は　少し止まってまた　飛び込んできた
「2発目！」
そういって　私達は　最後の犬に向かって　超電磁砲を撃った……
「ガウ！」
すると　犬の体から　雷のバリアが出てきて　超電磁砲を　防いできた！
そのまま　犬の体当たりをくらって　私とユウは　弾き飛んだ！
「キャア！」

吹き飛んだユウの所に犬が走っていった！

「このっ！」

私は　犬の背後から　電磁砲を撃った！

ジュィィィィイン！

雷が見事に　犬に直撃した！

しかし

パキッ

変な音とともに　電磁砲が私の方に飛んできた！

跳ね返されたのだ！

「キャアアア！」

雷を体にくらい　体が麻痺した！

『これが　新しい犬型バイオモンスターの能力……

脅威の学習進化』

だった…

「キャアッ！」

ユウの声が　聞こえた……

犬が　ユウの足を噛み付いたのだ……

「ユウ大丈夫！？」
そう　私はいった

ユウは　犬を振り払って
「大丈夫！　傷はバイオモンスターが修復してくれるから」
そういって　ユウは　犬に向かって　戦いの構えをとった

そして　犬に向かってユウは走ろうとして……

「！」

ユウは　転んだ！！

「あ　足が震えて…」
ユウの足は　犬に噛まれたことで　一時期麻痺をしたようだ！

「い　嫌っ！」

犬がジワジワと　ユウに近づいていく……

私は　力を振り絞り　ハンドガンを犬に　投げて当てた！

ガスッ！

犬の顔面に直撃した
そして　犬はユウじゃなく私を襲おうと走ってきた！

「これ　ヤバくない…」
そう私は　呟いた……

犬は　飛びつき　私の肩に噛み付いた！

「あぁ！」

肩に激痛が　走る！

それよりも　酷いことが　起きた！

服の繊維を吸収されたのだ！

鎖骨あたりの肌があわらになる…

「……」

それに　私は……

最高にいらついた……

「ユウ……今からとても　残酷なことが　起きるから　見ないでね☆」

そう　私はユウにいって　服を青く　光らせた！

ちなみに私が語尾に☆を入れる　ということは　怒りに満ちた状態である。

犬は　肩を噛み付きつつ服の繊維を吸収していく……

青い光を　沢山吸収していく……

私の乳房や　背中が見えていく……

そして　私は　いった。

「B級映画犬が！　エロぶってんじゃねぇー！」

そう　いうと　犬の体が止まる……

そして犬の体が膨らみ始める！

そして　……

破裂をおこす！

私は　犬に吸収された青く光るの服の力を使ったのだ！

何故青く　光っていたかというと　服をわからない程度に微分解させていたからだ！

その分解した服の繊維を犬が吸収……

それを犬の体内で　血流が大きい所に再構築。

それで　犬の体内爆破がおきたのだ……

ただ……

自分は上半身は裸になり……

そして……

「ク……クロ？……クロー！」

ユウの声がかすかに聞こえた……

RED（後書き）

いきなりクロの意識が途絶えた……

「クロ！」

私はそういって　クロの所まで　走った……

もう麻痺は消えている……

「とりあえず　クロを助けないと……」

そういって　私はクロを抱えて　ある研究室に向かった……

私が作られた……研究室へ……

Memory（前書き）

私の　記憶……

このワンピースが　お兄ちゃんが最後にくれたプレゼント……

Memory

「はぁ　はぁ……」

私は　クロを研究室の回復庫に載せて　クロのバイオテクノロジーの活性をさせた……

もともと　ここで作られた私は　研究室での医療技術は最初からインプットされていた……

ここに　来るまでに　たくさんの人間がいたが　できるだけ殺してきた……

超電磁砲は　3発使い切った……

「あと　10分で　クロは完全回復するだろう…」

そして私は　クロの体を見た……

そう　いえばクロは　上半身裸だ……

「こ　これは　ヤバい……」

とりあえず　クロの着れそうな服を　探した……

バイオテクノロジーでない服の所に　可愛らしいワンピースの服があった……

「クロに　似合うかな……」

そう　呟いて　私はそのワンピースを手にとった……

「！」

その時　何かが私の　頭の中に入り込んできた……

ある女の子と男の子がいた……その女の子は私だった……

「ソラ！　今日は　町に遊びにいこうぜ！」

「うん……アキお兄ちゃん」

そしてソラと言われた私はその　アキという兄にキスをして　家をでていった……

「ソラ　この服可愛いぜ　……　着てみなよ」

そういう　兄の声

「うん　お兄ちゃん」

少し照れながら　私は　ワンピースを着た……

その時だった！

スペインに　殺戮魔がでて　私に　ライフルを撃ったのだ……

「お　お兄ちゃ……」

そして　倒れる私がいた……

「ソラ……　おい……」

私を呼ぶ兄がいた……

「あっ　うあぁぁぁぁ！！！！ソラ！！誰かソラを！！」

その兄は　動かない私を抱えて　誰かに私を　助けてと　叫んだ！！！

しかし周りの人は　殺戮魔の恐怖で　その声も聞こえなかった……

そして　すでに私は　死んでいた……

そこで　殺戮魔の顔ある人が一瞬で吹き飛ばした！

そして　その人は　死んだ私と兄に　近づいて　こういった……

「教会で　新しい技術が生まれた……　その子を助けよう……」

その人は　そういった……

「頼む！　ソラを！！！」

そう兄はいった……

そして私は　ある容器の中に入れられて　卵を体内にいれられた……

そして　私は　5年の刻がたって　生き返った……

「アキは……　お兄ちゃんは……」

裸で私は　そういった……

「こ　　ここは……」

そこまでいって　ある男が私の頭に手を置いた……

「君は　お兄さんに売られたんだよ…」
男の声が　脳に響く……
「違う　　お兄ちゃんは……」

「なら　何故　君は　ここに一人でいるのかな？」

そこで　私は悲しみに捕われた……

「お兄さんは君を　教会に売ったんだよ。　君は　売られたんだ……
だから……君の記憶はすててもらう」
そう　私は言われて　私は記憶をなくして　名前もなくして　いたのだ……
そして　私は……
名前を求めて……

「！」

そして意識が　もどった……

「この　ワンピースは私の……そして　あの時の男の人は……」

その時　研究室にある男が　入ってきた……

その男は……

「アキ……お兄ちゃん……？」

そう私はいった……

Ｍｅｍｏｒｙ（後書き）

アキ

ソラ（ユウ）のお兄さん
現在は１９歳であったが……　ソラとの歳の差は1年しか違ってはいなかった……

教会に妹を渡したことを後悔し　そして殺戮魔に強い憤怒を持ち
ナイフだけで　人を簡単に殺せるように5年間手を血に染めてきた
……

ユウと同じように髪は青　目は緑……
身長は１８０ｃｍぐらいである……

攻撃力	★★★★☆
守備力	★☆☆☆☆
瞬発力	★★★★★
柔軟性	★★★★☆
格闘性	★★★★★
本能性	★★★☆☆
武器性	★★★★★
頭脳性	★★★★☆

哀（前書き）

涙が流れた……

「お兄ちゃん……」
私はそういって

キスをした……

哀

「お兄ちゃん！」

そういって私は　お兄ちゃんをみた……
そう私は　ソラは　お兄ちゃんをみた……
そして涙腺が潤んできた……
その時に……

お兄ちゃんは私にいきなり襲い掛かってきた！

「えっ！」

私は首を捕まれた……

「お　　お兄ちゃん……」
私はそのまま地面に叩きつけられた！

「あっ！」

痛みが体に走る
そして私は　投げられた……
私は　研究医薬品の所にぶつかり　服がボロボロになった……
そして　お兄ちゃんがまた走って襲ってきた……

そして　体を足で踏み付けられた……

「まさか……お兄ちゃん……っ」

私は気づいた……

お兄ちゃんは……洗脳されている……

私の記憶を奪ったあの男に……

私は　お兄ちゃんの足を払って　お兄ちゃんに抱き着いた……

「お兄ちゃん……もうやめて……」

私はそういった……

涙が頬をつたって　お兄ちゃんにもあたる……

その私にお兄ちゃんはパンチをする……

お腹にあたる……

それでも私はお兄ちゃんを抱きしめる……

そして

キスをする……

今まで　お兄ちゃんと一番やった　キスをする……

お兄ちゃんは　私を殴りつづける……

それでも　キスをする　涙を流しながら　　お兄ちゃんにキスをする……

そして　こういう……

「ごめんね……アキお兄ちゃん……私のせいで　…　こんなに苦しめて……」

私は涙を流して　そういった……

そして　お兄ちゃんの頬に涙が流れた……

お兄ちゃんも泣いていた……

私を殴る手を止めて泣いていた……

「ごめんな……ソラ……　ユウって名前を大切にしろよ……」

そういう　お兄ちゃんの声が聞こえた……

「お兄……ちゃん」

お兄ちゃんの体が　粒子となって　消えていく……

「なっ！　お兄ちゃん！　お兄ちゃん！」

私は　叫ぶ……

「ごめん…　ソラ……ごめん　…ユウ……」

だんだん　お兄ちゃんの体が消えていく……

私は　すぐに　服を脱いだ……

そして　ワンピースを着た……
そして……

「謝らないで……お兄ちゃん……　ありがとう……　アキ　お兄ちゃん……」
そういって　私は　お兄ちゃんに最後のキスをした……
涙が……　二人の涙が　交際しながら……

お兄ちゃんは消えていった……

「お兄ちゃん……」

そういった……

「あああああぁぁぁぁぁ！！！！！！」

私は　泣いた……

もうそろそろ　クロは　完全回復するだろう……

哀（後書き）

そろそろ　クロの旅は　完結編へと……

よかったら　感想お願いします☆

怨（前書き）

ユウの記憶を消した男

ユウの記憶を消した張本人……　触れた相手の中に　バイオモンスターを　埋め込み　脳の中を　バイオモンスターが囁き　自分の思ったとうりに　左右することができる……

身長は１９０ｃｍぐらいで　茶髪赤眼……

攻撃力	★☆☆☆☆
守備力	☆☆☆☆☆
瞬発力	★☆☆☆☆
柔軟性	☆☆☆☆☆
格闘性	☆☆☆☆☆
本能性	☆☆☆☆☆
頭脳性	★★★★☆

怨

私は　目が覚めた……

「ユウ……？」

ユウは　ワンピースを着てそこに立っていた……

バイオテクノロジーが取り組まれていないワンピースを……

私は

「似合ってるね」

そういった……

「うん……」

いつもより小さい声で返事をした……

そういえば……

「！」

私は　上半身裸だった！！

「はわわ」

とりあえず　近くにあった黒いバイオテクノロジー戦闘服を着た……

……

「クロ……いこう……」
そう　ユウはいってきた……

「うん」
そう私が　いった時！

「どこに行くのかな？」
そんな男の声が聞こえた……
その男は　バイオモンスター　だった……

「やはり　貴方が黒幕だったんだね……」
そう　ユウはいった……

「クロ……気をつけて……　この男に触れると……　自分の意識を　狂わされる……」

そう　ユウはいった……
何か怒りが　背中から見えた……
男に対する　ユウの怒りが見えた……

「わかった　ユウ……　超電磁砲で　仕留めよう……」

そういった時……

「残念☆」
そんな男の声が聞こえた……

そして　ユウが私に襲ってきた……

精神（前書き）

（お前は　何故その女を殺さない……）
私の友達だから……
（友達？　君は道具だろ）
なっ　何を？
（お前は　あの女にかかわらなければ　愛しの兄を失わなくてすんだんだぞ）
違う　それは！
（違わないよ。　違わないから君は苦しんでいる）
やめて！
（苦しみを　晴らすためには　殺すんだ）
やめ……
（クロを殺すんだ）
や……

（殺せ！）
……

ああ　殺す
殺さないといけないんだ……
私はクロを殺す……

精神

「やめて！　ユウ！」
私はユウの攻撃を止めながらいった……

「無理だ　　もう　その女は　私のバイオモンスターによって左右されている」

そういう男に私は　電磁砲を撃とうとしたが
ハンドガンはユウがもっていた……

私は　仕方なく　男に殴りかかった！

「一発で　殺せば！」
しかし　男は一発では　死ななかった……
いや……
男を殴っても　手応えすらなかった！

「一ついいましょう。私は人でも人型バイオモンスターでも　ありません。
私は　ある人のバイオモンスター能力によって作られた　その人の分身なのですよ」
そう男は　いった！

「だったら！」
私は　そのバイオモンスターをバイオモンスター能力で分解　させた！

しかし　私に　洗脳が降り懸かってきた……

変わりにユウの洗脳がとけたみたいだ……

「ク　クロ！　私！」

「離れて！　ユウ！！私が！！ユウを！！！」

そういって　ある心の中に入っていった……

そこには　私が分解したはずの男がいた……

「どうして　君は　あの女と一緒にいる？　君はバイオモンスターを殺すんだったろ？　あの女もモンスターだよ　殺さなきゃ」

「黙れ！」

そう私はいった……

「なんで　あの女を生かす理由がある？」

「友達だから……

「それは　君の一人よがりじゃないのか？」

「何を！」

「相手は　君をどう　思っているか　わかるの？
なんで　相手の本当の気持ちもわからずに　友達というの？」

「確かに　私が　かってに友達と思っているだけかもしれない」

「だろ。　だから　そんな奴は殺し……

「でもさ……ユウも私を友達として見ててくれてるかもしれない
……」

「見てないかもしれないよ？」

「そう　だったら悲しいね」

「だろ　だからそんなこと起きないように　今のうちに殺すんだ」

「確かに　その方が正しいかもしれないね……でも……」

「でも？」

「本当に私を友達としてみていてくれているとしたら　私もユウも悲しむことになる……」

「……」

「それに　……私はユウが　どんなに私を思っていようとしても　私は友達だから　って決めているから……」

「そうか……
強いな　君は……
君は洗脳できそうにない……」

そういって私の意識はもどった……

精神（後書き）

「ユウ……」
そう　いって　私はユウを見た……

「クロ……」

「私は　貴女の友達だから……」
そう　私はいった……

「うん。」

そう　ユウはいった……

最終戦（前書き）

その男は　私にキスをした……

私は　犯された……

そして　私は　怒りにまかせ

男に雷化で挑んだ

「殺す！！」

その思いをもって……

最終戦

私とユウは　教会を　壊しながら　進んだ……

超電磁砲を一発使用使用して　ある　監禁室のなかに入った……

「　大統領の娘はいるか！？」
そう私はいった……
しかし　そこには誰もいなかった……

「ここまで着たか……
よく俺の分身を打ち砕いた……」

そういって　ある男が入ってきた……

さっきの洗脳能力の男　に似ていたが……とても若く見えた……

「大統領の娘か……
いい奴を貰った……
この娘さえいれば　俺を楽しませてくれる奴が　たくさんくる。
しかも　今回の獲物は　特上品だ……。」
そういう男に私はこういった

「誰が　特上品だって！？」
すると！
「君だよ……　　クロ！」
その声とともに私のあごに掌打をくらった！
「がっ！」
吹き飛ぶ私をユウが掴んだ……
そしてユウは　こういった！
「それだけのために！　私を！　　お兄ちゃんを！！！」
そういって　ユウは　私の手を握り　超電磁砲を撃った！！
「これが　超電磁砲か……」
その男は　そういって　超電磁砲を掴んだ
「ちょっと　痛いな……」
そういい　男は超電磁砲を握り潰した！！
「なっ！」
ユウが驚く！！　もちろん私も驚いた！！！
「そうだ…　いいことをいうよ。　　サンプルは大統領の娘に預けている……　俺に勝てたら　サンプルと大統領の娘を貰ってもいい…」

そういって　男は　私達の足を同時に掴んだ！

「でも……　俺に負けたら　君達は一生　俺の奴隷だから☆」

そういって私達は　壁に叩きつけられた！！

「あぁ！」

痛みが走る！！！

「どんな命令も聞いてもらうよ……　それが　いかに残酷なことでも……　俺の性欲のはけ口に使われたとしても……」

さりげなく　最悪な言葉を言う奴に　ラスト超電磁砲を撃った！！！

しかし　その男は私の目の前にいた！！！！

「この！！」

私は　睨んだ

とても　強く　人を　自分のためだけに　思う奴の目を

睨んだ……

「はぁ！」

その男の顔に　横からユウが　パンチをした！

しかし男は　手でその攻撃を止めて　私に顔を近づけてきた……

「な……　やめ……！」

男の唇が　私の唇と交際する……

男の舌が　入ってくる！！

私は　その舌を噛み切ろうとした！！

しかし私の舌が勝手に男の口の中に入っていってしまったのだ……！

私は　まだディープキスの　経験がなかった……

男の舌に無理矢理　私の舌が動かされるのだ……！！

「むっ！　んんん！」

私は　男の腹を殴ろうとするが　簡単に手で止められる！！

左手で私の頭を支えた状態で　右手だけで私とユウの攻撃を止めながら　キスをしていく……

涙が　出る……

羞恥や屈辱と　非力さを同時に　教えられて　犯される……

今までの敵とは　全て違って　欲望だらけの怪物に　そんな怪物ごときに私は犯される……

その時　私は　体に　雷を纏った……
一発目から　１５分間たったのだ……

男は　私から　とうざかり　私の涙を見ながら　笑っていた……

「ねぇ……ユウ……　この雷の強化をお願い……」
そうユウにいった……

これは　とてもリスクの高いことだとしって私はユウにいった……
……

そのことを　ユウはしっていた……
でも　ユウは……
「わかった……」

そういって私の雷を強化した！

「がぁ！　あああぁぁぁぁ！！！　がああぁぁぁぁあ！！！！」
今までにない痛みが体を走る！！　気絶をしそうにもなる！！！！

「ははは！　面白い！！！　俺と同じぐらいの力になって……
「黙れ　グズが！！」

そういって　私は　高速で男に突っ込んで　腹にパンチをした！！

「がぁぁぁ！！！」

そのまま　その男を引きずり　壁に叩きつけた！！

「おもしれぇ！」

男も　私の肉体速度について来て攻撃をする！！

だが！！！！

「なっ！！」

私は　男に抱き着き　男にキスをした！！

逆に私から　キスされた男は　戸惑っていた！！！

そして　私は　男の口の中に　私の体内の雷の全てを吐き出した！！！！

「うあああぁぁあ！！！！」

男の絶叫の中

私は　その男の舌を引きずりだし　その舌を噛み切った！！！！

「はぁ　はぁ……」

私は　その男を倒した……
ユウは　私を見ていた……

ただの　むなしい最後に　私達は　喜びも何もなかった……

私は　口を濯ぎ
ユウと一緒大統領の娘の所に　迎えにいった……

最終戦（後書き）

男

スペインの闇の組織の頭領
身長は１７０ｃｍぐらいである……
人の心を弄ぶのが最高の快楽としている　男……

攻撃力　★★★★★
守備力　★★★☆☆
瞬発力　★★★★★★
柔軟性　★★☆☆☆
格闘性　★★★☆☆
本能性　★★★★★
武器性　★☆☆☆☆
頭脳性　★★★☆☆

クロ　（雷化）
攻撃力　★★★★★
守備力　★☆☆☆☆
瞬発力　★★★★★★
柔軟性　★★★★☆
格闘性　★★★★★
本能性　★★★★★
武器性　☆☆☆☆☆
頭脳性　★★★★☆

『Ｙｏｕ』ｂｅｃｏｍｅ　『Ｓｋｙ』（前書き）

私は　キスをした……

そして　ユウはソラとなった……

『Ｙｏｕ』ｂｅｃｏｍｅ　『Ｓｋｙ』

私は　クロについていった……

大統領の娘の救助とサンプルの回収があるらしい……

私はクロについていった……

もし……　このまま旅が終わったら　私はどうなるのだろう？

そんな思いがあった……

私はクロと一緒にいられるか　解らない……

ただ　私は　クロについていった……

私はクロが好きだから……

クロと最上階、ヘリポートまで着いた……

　何故ヘリポートが教会にあるのか……

多分昔は　儀式をするために出来た場所が不要になりヘリポートとして使われるようになったのだろう……

そこには　女がいた……

「貴女が大統領の娘ですか？」
そう　クロはいった……

「はい　私は大統領の娘　　アイリーです。」
そう　いって　アイリーという女は　サンプルを見せた……

「よかった……無事だった……」
そういって　クロはアイリーに近づいて　サンプルを取ろうとした
……

その時！！

「じゃあね」

アイリーがそういって　クロの体にナイフが刺さっていた！！

「なっ　　どうして！」
そう　私はいった……

「貴女達は馬鹿？　なんで大統領の娘が簡単に人質になっているっていうの？　　私に与えられたミッションは　大統領の娘のふりをして　　頭領からサンプルを回収することと……　サンプルを破壊するおそれがあったクロの殺害」

「そ　そんな……」
そういって　クロは倒れていった……

「私のバイオモンスター能力　　ただの人間　　殺気のない
人間になる能力……　これだけで　ここまで上手くいくなんて
私は思ってもいなかった……
まあ　ここのスペインの頭領に　何度もあんなめや　こんなめに
されたけどね☆」

「！！」
その話の終わるときぐらいに　ヘリコプターがきた！！

「その　苦労も　これで終わり……　バイバイ」
そういってアイリーはさっていった……

私はクロの所に走っていった！
そのときには　クロは死んでいた……

「あああああぁぁぁぁぁ」
私は叫んだ　泣いた

そして……

「ダメ　死んじゃ！！私が！！　私が助ける！！！！」

そういって　私は　クロの胸に手を当てた……

私のバイオモンスター……バイオテクノロジーの強化で　クロのバイオモンスターを復活させようとした……

私の体が青く光っていき　クロの体に力を送っていった　……

無理矢理クロのバイオモンスターを起動させて　私の体をクロの体に　取り込ませていく……

「今まで　ありがとう……」

私の体が　粒子となってクロの中に入っていく……

超電磁砲と一緒にクロの中に入っていく……

たった　１６時間前に出会って　友達となっただけのクロに　私は
命をそそいでいる……

なぜなら……

私は……

「好きだよ……クロ」

そういって私は　キスをした……

『Ｙｏｕ』ｂｅｃｏｍｅ　『Ｓｋｙ』（後書き）

私はクロを空でみてるから……

『Ｙｏｕ』て由来から　名付けられた　私は【ユウ】は　『Ｓｋｙ』から【ソラ】からクロを見てるから……

『クロの貴女は　空にいるから……』

Ｌａｓｔ　ＫＵＲＯ　Ｂｌａｃｋ（前書き）

最終回です。

今までありがとう　ございました

納得のいかないようなストーリーですみません

出来れば感想を下さい……

それじゃ　ＬａｓｔＳｔｏｒｙへ…

私の体に　力がそそがれている……
体に雷の力がわいてくる……
何故……

私は　死んだのに……

（チュッ）

ユウの唇の感触？
私は……！

「！」

そして私は　目が覚めた……

私は　ヘリポートにいた……

何の怪我もなく　生きていた……

「ユウ！私！……！」

そいって息を飲んだ……

私の目の前には　バイオテクノロジーのない　ユウのワンピース以外何もなかった……

「えっ　ユ　ユウ？」

その時　ユウの今までの記憶が私の脳に浮かび上がった！！！

ユウはソラって名前だった……
アキというお兄ちゃんがしんだ……
私を助けた……
そのせいでユウは私の中に消えた……

そして

ユウが私を好きだった……

「……」

沈黙

そして

悲しみ　哀　怒り

全てが　涙になって現れた！！！

雷をこの教会全てに私は落とした！！！

私は裸になった……

そしてユウの残したワンピースを着て私は吠えた！

「がああああぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

私は　怒り　雷化で空を飛んだ　……

ソラのおかげで……

貴女……ユウのおかげで私はここまで……

そういって　前方に飛ぶヘリコプターを貫いた……

「うあああぁぁぁぁ！！！！！」

私はそのヘリコプターに乗っていた　アイリーって女を掴んで　空

を飛んでいった　……

そう　アフリカにある　私の元　組織を　ぶっ壊す為に！！

私は　アフリカの本土にすぐついた……

手で握っていた　女を　雷で　黒く　して　しまいには白くなるまで　雷を浴びせていった……

その女は何かいっていたが　私は何も聞かずに殺した……

白い人形になった　女を私は　地面に落とした　……

地面に落ちる前にその白い人形は　消えてなくなっていった……

「敵だ　新型バイオモンスターを出せ！」

その音とともに　約１０体のモンスターが見えた……

ただ　私が　それを見ただけで　そのモンスターは　塵となって消えていった……

すると　次は　約　２０００を越えるモンスター　が出てきた……
……

私は右手を　一度振った……

同時に　そのモンスターの全てが　黒く　そして白の塵に　なって
消えた……
「バイオテクノロジー砲　打てーーーー！！！！」
そういう声が聞こえて　とんでもない力のエネルギー砲が飛ん
できた……

私に　そんなものは　火の粉と同じだった

私の雷が全てを打ち消す！！！

私の雷に限界はない！！！

すると　ある男が出てきた……

その男からは　一億を越えるバイオモンスター反応が見れた……

「いかに最強であろうと　開発者の俺には　かなうわけがない！」
そういって　男が音速で私にとんでくる……
たかが音速でとんでくる！！！
私の高速は　その男をたたき付けた！！！

いきなり　力を奪われた感じがした……

「はっ　ははははは！！！　俺のバイオモンスターは　他社のバイオテクノロジーを自分のものにするんだ！！」
そういって　私の力を奪っていった……

私はただ　力を渡していった……

「なっ　こいつは！！！！！！」

そんな男の声が聞こえるなか私は

体に雷を纏わせる
ワンピースがきらめく

まるで　アンドゥの神さま見たいに私は　雷を纏わせる……

「もう　すいきれな……」

そんな男に私は　パンチを食らわせた……

しかし男は　吹っ飛ばない……

「は　はは

ははははははははははは

どうやらお前の攻撃はもう　俺には……」

そんな声をだしている奴に向けて

１００万ボルトの雷を手にやどした……

「ま　まて　何故　そんな力が！？」

またずに　私は　雷を放った！！！

一瞬で男は　蒸発して消えていった……

そして私は　最大級の雷をこの組織の本土に落とした……

私のちっぽけな雷がユウのバイオテクノロジーの強化で　無限に強化されていた……

その無限の力の雷が　アフリカの全てに降り注ぐ……

そして　　バイオモンスターは　滅びた……

そして私も　力を使いすぎて粒子となっていった……

私は　粒子になりゆく前にある　光が現れた……

「ユウ！」

私は　そういった……

ユウは笑ってこういった

「やっぱり　クロも似合うね　　ワンピース」

そんな　声が　聞こえた……

目の前にユウがいた

私は　手を伸ばしユウに触れようとしたが　手はもうなくなっていた……

だから……

私は　その目の前のユウにキスをした……

「私も好きだった……」

そういって　私は全てが消えていった……

ある何かを……

綺麗で　チクチクしたしたワンピースを残して私は消えていった……

……

これで　ｍｉｓｓｉｏｎは終了した……

１７時間の旅はこれで終わった……

Last KURO Black（後書き）

これで　全てが終わった……

バイオモンスターは世界に何一つとして　存在しない……

ただ　バイオモンスターの着ていた　ワンピースはまだ
存在はしている……

クロとユウはまだ　存在している……

そう

貴女の空に黒き優しい光で……

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4718m/

クロの旅〜Black.story〜

2010年10月11日00時23分発行